

- 奥彌兵衛砲術傳授起請文 一通 ○雪舟筆 李唐山水
 奥彌兵衛砲術傳授起請文 一通 ○雪舟筆 李唐牧童
 ○能阿彌筆 觀音中 三幅 ○秋月筆 朝陽
 ○相阿彌筆 寒山拾得 左右 ○元信筆 舜中山水 左右

- 淺野光晟遺物分配狀 一通 明成國書
 ○元庵普寧法語 一幅 ○探幽筆 舜舉海棠 一幅
 ○愚中周及法語 一幅 ○松花堂筆 鴨長明 一幅
 ○靈石如芝題言 一幅

書

評

東方學報 東京第三冊

京都研究所のそれと並んで次を逐うて發刊されつゝある東方文化學院東京研究所の昭和七年度業績の公刊されたものである。收載論文七篇のうち美術史並に考古學に關するもの左の二篇がある。

被帽地藏菩薩像の分布

松本榮一氏

極東に行はれたる地藏菩薩像中に聲聞形より出でたる一變種として頭布を戴けるものあることを指摘し、知り得る限りの作例の盡くを列擧されてゐる。即ち數へらるゝもの、ヤール・ホト發見のもの一、燉煌壁畫中のもの一、燉煌發見の絹本或は紙本のもの十七、支那本土に於ける作例二、朝鮮制作のもの三、であつて、それ等の各について或は寫眞を載せ或はスケッチを示して能ふ限り圖樣を明かにし、而してこの被帽地藏が六道、十王、金毛獅子、道明和尚等を伴ふことが最も完備せる形式なるべきを説き、それ等の經軌を究め、就中金毛獅子と道明と被帽形との典據として「鳴沙餘韻」に掲げらるゝスタイン氏將來文書中の一記文を採り、之によつて今日佚失せる「還魂記」なる一書こそその像容の源なるべきを論定し、延いて我國にも能滿院地藏十王圖、或は寶福寺地藏菩薩等の作例あることより推して必ずやこの種被帽地藏も作られたであらうと述べられたものである。

氏の研究の資料の蒐集に周到にして考證の妥當なるは吾人の常に推服するところである。この一論文またその例に洩れず、教へらるゝところ尠からざるも

のがある。唯僅かに一言したきは、氏の引用せられたるスタイン氏の燉煌將來文書は道明と獅子とについての明かなる典據たることはよく首肯せられるが被帽の像容に關して氏がその「禪僧（禪に在る僧の意）の語より頭布を被るに至つた理由も説明されるやうに思はれると述べられてゐる點は、なほ一段の具體的な説明を惜まれたるを遺憾とすることである。

因に本論文の主旨は本年二月二十三日東京帝大に於ける考古學會例會に於て同氏によつて講演せられた。

徑路刀考

江上波夫氏

秦漢時代の支那藝術に西方系の要素、詳しく云へば所謂スキト・シベリア系のモチーフが、顯著な影響を見せてゐることは、近年考古學的資料の累積と共に愈々闡明されつゝあるが、その媒介者として匈奴が重要な役割を果してゐることは、夙に想像されながら具體的な例證を見せる研究は未だ多く發表されてゐない。江上氏の目的は藝術研究ではないが、茲に匈奴の武器「徑路刀」の本體を仔細に検討された一篇は、前述の聯絡關係に興味を持つものに甚だ益する所多き示唆を提供するものである。

ペルシア人、スキチア人等の用ひた兩刃の短劍は、ヘロドトス等の記述によつてギリシア名アキナケスと呼ばれたものであるが、此の形式の短劍は古代アジアを横行した遊牧民の間に傳播されて、東は東部ロシア、シベリア、蒙古、支那にまで及んでゐることが、遺物の調査と共に明らかにされる。近年蒙古及支那の北邊から出土するものにはスキト・シベリア的意匠の外支那式のものもが附飾されるものが見られる所から、此地方に於ても製作使用されたことが知ら

れ、且つその支那的意匠を考察してその年代が周末漢初まで溯することも證明される。斯くて筆者はその傳播の中間に立つた匈奴の地域内でアキナクス形短劍が盛に使用され、匈奴の刀劍徑路刀の實體がこの種のものであらうと推定し、更に旁證としてその名稱がアキナクスを語源とする轉訛であること、又徑路刀に伴ふ宗教的習俗と全く同じものがスキチア人の間にもアキナクスに就て行はれてゐたこと等を説いて居られる。

イラン、スキチア、シペリア、支那に互る古代文化の連絡關係は、近年重視されて歐米學者の間には時に概説的な結論を急ぐ巧妙な論なども現はれてゐるが、現在に於ては、考古學的資料と文獻とを考量しつゝ小部分より解明に努めて行くことがより急務とさるべきであつて、其の點で本論の寄與は少からぬであらう。(渡邊)

四六倍判、本文三七四頁、圖版八葉、昭和七年十二月八日發行 東方文化學院東京研究所、定價三圓五十錢

梅原末治編 歐米 支那古銅精華

支那古銅精華は彝器、鏡鑑、利器其他雜器の三部に分たれ、その第一部彝器編三冊が這般上梓せらるゝに至つた。收載する所は冠注に明なる如く、現今歐米に散在蒐儲せらるゝ支那古銅器の内、編者が親しく觀摩甄別の上その精品を網羅するものである。編者が如何なる標準によつて、これらのものを撰擇されたか、此點に關して云爲し得るものは唯編者と同様に普く歐米の支那古銅器の蒐集を博搜、遍覽した者でなければなし能はざる所であつて、此書に接する者は先づ編者の調査範圍の廣汎に互れるを多とし、一に編者の識見に従ふの外はない。

本書には解説が附してゐないので編者の各器に就ての見解或は支那古銅器に關する綜合的見解等はこゝに知り難いが、それは編者も既に辯明された如く、編者の今後に互る諸種の研究發表と比較參看する事を要する。然しながらその

書 評

見解の一部が編纂方針の上に現されてゐる事は編者の序例に明言する所の如くである。即ち所謂三代銅器は姑く措き、所謂秦漢銅器に就ては之を圖紋表現の手法によつて分類せる事をその特異の點とすべく、編者は此分類によつて所謂秦器より漢器への推移の迹を辿り得るものであるとの見解を洩してゐる。鏡鑑に關しては從來の著錄に既に此方法は不完全ながら用ひられてゐたのであるが、彝器に關して此の分類を行つた事は本書を以て嚆矢とし、その見解は尙今後の新資料の發見等によつて幾分の訂正を要すべきものであるであらうが、かゝる研究態度は恐らく今後の此種圖錄の編纂、或は更に廣く斯學研究の上に多大の影響を及ぼすものであらう。

本邦に齎來された古銅器の精品は、泉屋精賞及び支那工藝圖鑑等により比較的詳細に紹介されてゐるが、歐米に存するものにあつては、少數の個人蒐藏圖錄があり、日本出版のものでは唐宋精華を擧げる事が出来るが、更に學術的見地に立ち、廣く世界全般の收儲に互るものとして本圖錄は從來のものに見る事を得ざる特色と價値を有するものであると云ふ事が出来る。(正木)

縱一尺二寸 横一尺 圖版コロタイプ版 二五〇葉
昭和八年 月 山中商會發行 定價一五〇圓

余紹宋 書畫書錄解題

目錄の學は清代に於て其盛を極むと稱せらるゝと雖も、その書畫に關する限り吾人は纔に四庫全書總目提要を以て甘んじなければならなかつた。四庫提要固より善書と謂ふべきも、尙經書に精にして藝術に疎なるの憾なしとせず、書畫專目の出づるを待望する事久しきものがあつた。今余紹宋氏平昔蘊む所を傾注して此書を成す。蓋し支那美術史圖書解題は是に於て初めて具はれりと云ふべきである。余氏は杭州湖上に退居して悠々讀書を樂む篤學者である。鄭昶氏を現代支那に於ける美術史上の新しき學風を代表する學者とせば、余氏は正に舊來の學風を代表する耆宿であつて、鄭氏に曩に中國畫學全史の名著あり、今